



黒井へいほ
はれまく。

異世界で精靈
Mediums loved
by the spirits.4

4

黒井へいほ
Kuroi Meiko



アマリス (アマ公)

オルフェン王国の姫騎士で、グレイスの姉。後先考えない性格。

水の大精霊

ゼリ湖に住む絶世の美女。女の敵?

火の大精霊

フューカーに住む威厳ある大精霊。

コウヤ (坊ちゃん)

アマリスの尻に敷かれる光の大精霊。残念イケメン。

リルリ

グレイス付きのメイド。主人には従順だが、裏の顔も持つ。

真内零

目つきを怖がられるヤンキー。異世界に転生し、精霊に慕われまくる。闇の大精霊。

土の大精霊

岩の被り物を着た大精霊。口癖は「がな」。

風の大精霊

老婆の姿をした大精霊。いつも零を叱る。

精霊達(チビ共)

岩やマッチのような被り物をした精霊。零のことが大好き。

グレイス(グス公)

オルフェン王国の第二王女。「あわあわ」するのが癖。

ディーラ

長い時を生きるドラゴン。人が複数乗れるサイズにも小型にもなれる。

Headbands loved by the sprits.

CHARACTER

主な登場人物

第一話 ……おお、動かなくなつてやがるな

精靈達^{チビども}が増えたことによる魔力の増加。

俺——真内零^{まないぜろ}は、その問題を解決するために精靈の森を旅立つた。

だけどなあ、世界に魔力が増えすぎたからといって、別に何の問題も起きてねえ。
一年前にも一緒に旅をした王女のグス公やアマ公、メイドのリルリ、光の大精靈コウヤこと坊ちゃんに協力してもらつて、情報を探したんだが……大した収穫はなく、ただ平穩に日々を過ごしてしまつた。

何も起きてないんじやねえか？

そもそも思つたが、チビ共に関わることである以上、放つてはおけない。

——そして見つけた、異常事態。

それは、変な黒い穴による問題だ。

実際は問題が起つていてることにすら気づいていない奴のほうが多かつた。

世界を巡り地・水・風の大精靈に会つた俺たちは、魔法を吸い込む黒い穴によつて起つた数々の問題を解決し、最後に火の大精靈に会うべくフューリー火山に向かつた。

で、そこで出くわしたのが、暴走するドラゴンだ。こいつも黒い穴のせいでおかしくなつしまつてた。

俺らは協力してドラゴンにあつた黒い穴を破壊し、正気に戻してやつた。

つつても、黒い穴を壊せるのは俺だけなんだが。理由はよく分からねえが、一年前に闇の大精霊として俺が世界を変革したことが関係してるらしい。まあ、どうでもいいけどよ。

火の大精霊によると、チビ共が増えたことで世界に溢れた魔力を、何者かが黒い穴から吸い上げようとしているらしい。

つまり、黒い穴はなんかやべえやつだ。

何のために魔力を吸い上げてるのかは分からねえが、とりあえず黒い穴をぶつ壊して、その「何者」かつてのを探さないといけねえ。

俺たちはドラゴン——ディーラを仲間に加えて、問題を解決するために動き出した……んだが、暴走したディーラとの戦いは結構ハードだつたからな。ひとまず町に戻つて一息つこうぜ。

チビたち心配そうな顔してんな！ 大丈夫だ、俺がなんとかしてやらあ！

——今、俺たちはフューラの町で宿をとつている。

フューラの町は、ほとんど落ち着きを取り戻していた。

黒い穴の影響で瘴氣による病が蔓延し、大変なことになつていたから心配だつたんだが、俺とチビ共が広めた薬が効いたらしい。

町の人たちはすっかり元気になつて、フューラ火山から戻つた俺らを歓迎してくれた。まあ、出迎えてくれたのは、鉱山で働くオカマ口調の屈強な男たちだつたが。

火山は暑かつたし汗を流そつてことで、皆で風呂に向かう。
お、露天風呂か。なんだか懐かしいな。

俺は熱い湯を一度掛けて、体を洗う。そしてゆつくりと湯船に体を沈めた。

「ふう……」

「ぬるいな」

いい気分で風呂に入つた瞬間、隣で頭の上半分だけを出していたディーラが言う。情緒を感じる暇すらねえ。

俺は少し不機嫌になり、ディーラの角を突いた。

「あのなあ。てめえはいつも溶岩に浸かつてたからそう感じるのかもしれねえが、普通はこんなもんだ。後、大事なのは風情^{ふぜい}つてやつだろ？ 心が落ち着かねえか？」

「ふむ、確かに……悪くはないな」

「いやいやいや！ 僕たちは黒い穴の問題を解決しなければいけないのでですよ！ なぜゆつくりと湯に浸かっているのですか!?」

自分もさつきまで気が抜けた顔をしてやがつたくせに、坊ちゃんがいきなりギャーギャーと騒ぎだす。

焦^{あせ}つたつてしまふがねえんだから、ぶつくさ言うなよ。

俺は隣にいるうるせえ奴の頭を掴み、湯の中にぶち込んだ。

「もがっ！　ぼこぼこぼこ！」

「おう、そりゃだろ？　やつぱり休むのも大事だからな」「やめてくれと言つてているように、我には聞こえるぞ」

「ああ？　——おお、動かなくなつてやがるな」

裸力して停止している坊ちゃんを見て、ちょっとまずそんなりで引き上げてやる。

真っ赤になつた坊ちゃんは、鼻や口から湯を出してくらべくらしていた。汚えなあ。

だが、実際坊ちゃんの言つてたことも間違つてゐるわけじゃない。

問題は山積みというか、どうしたらいいか分からねえ。

裸の付き合いをしつつ、今後の方針を決めないとけねえな。

湯船の縁に置いてあるタオルを頭の上へ載せる。すると、俺に倣つてチビ共も楽しそうにタオルを載せた。分かつてんじやねえか。

手を合わせて前にグッと伸ばす。ああああああ、と自然に声が出た。

そんな俺が面白かったのか、チビ共も真似をしてゐる。声が聞こえてくるようだ。

後は風呂から上がつて、腰に手を当てて牛乳でも飲めば完璧だ。

少しまつたりしてゐると、隣から荒い息が聞こえてきた。

坊ちゃんの意識が戻つたことを確認して、俺は改めて二人に話しかける。

「で、黒い穴はなんなんだ？　後、これからどうしたらしい？　黒い穴を探してぶつ壊し続ければ

いいのか？」

「それでは根本的な解決にならない」

湯船から気持ち良さそうに顔だけを出しているディーラは、緊張感なく言つた。

身が縮こまるほどの恐ろしい火を吐き出してたのに、小さくなると可愛いもんだ。面白がつてチビを頭の上に乗せてみたが、ディーラは少し汚い顔をしただけで文句は言わなかつた。

頭の上にあるタオルの位置を調整しつつ考える。

根本的な解決……つまりそれは、黒い穴が現れないようにすることだろう。

じゃあ、どうしたら現れなくなる？

俺はパシャリと湯で顔を流し、ディーラを^ま摘み上げた。

「黒い穴はどうしたら出なくなんだ？」

手の中で暴れているディーラが俺の顔に湯を飛ばす。しかし放すつもりがないことが分かると、やれやれといった様子のまま考えだした。

言葉を待つ僅かな時間。俺たちは無言でディーラを見続ける。
少し俯いていたディーラは、顔を上げて話しかめた。

「……黒い穴を出現させてゐる者を叩くしかないが、情報が足りない。犯人に心当たりがないわけではないものの、まだ自信をもつて言うことはできないからな。まずは今一度、黒い穴を探すべきだろう」「なるほど。では黒い穴のある場所は、どう探せばいいのですか？」

「分からん」

「使えねえなあ」

ディーラは坊ちゃんの質問に対し、首を横に振る。その後、摘み上げている俺の手を払い、湯の中に戻った。こいつ、俺らより風呂を満喫してんじゃねえか？

それでも、また黒い穴を探すところから始めないと云うのか。

正直うんざりする気持ちもあつたが、チビ共のためだ。

「どこにあるかは分からねえが、今までなんとかなつたんだ。きっと見つかるだろう」

「そんな甘い考えでどうする！ 間雲やみくもを探し、見つからなかつたらどうするんだ！ 一生穴探し

か!?」
女湯から叫んできたのはアマ公だ。

俺の隣にいる坊ちゃんはビクリと肩を動かすと、困ったような表情になつた。

「こいつはアマ公の尻に敷かれてるからな。どう返せば一番波風が立たないか考えてるんだろう。えーと……確かにアマリスの言うことにも一理ありますか……。とりあえず話は部屋に戻つてからでいいのでは？ 今、無理に会話へ参加しなくてもいいと思いますよ」

「だつてだつて！ こつちは普通にお風呂を堪能たんのうしているのに、眞面目な会話が聞こえてくるんですよ!? ちょっと申し訳なくなつちゃうじやないですか！」

「グレイス様、急に立ち上がりなでください。顔にお湯がかかりました」

「あ、ごめんなさいリルリ」

坊ちゃんに言い返してきたのはグス公だ。

「女三人揃えば喧やがましい……だつけか？ ……なんかちょっと言葉が違う気もするが、大体あつてるだろう。とにかく、その言葉がぴつたりだと思った。

しかしそれ、世界が嫌な感じになつてていることは間違いねえ。

フューラの町で起きたようなことが、他のところでも起こつたらどうする？ そう考へると、目的地を定め、素早く動くに越したことはないだろう。

—— 黒い穴の場所、か。

これまでの穴のあつた場所に特に法則があつたとも思えねえし、次の場所を予想するのは中々難しい気がする。

「やかましい三人娘とも協力して、より良い方針を考えるのも悪くない。

俺はそう思い至り、女湯の方へ声を掛けた。

「なあ、お前たちは黒い穴がありそうな場所とか分かるか？」

「ありそうな場所、ですか？ ええつと今までに黒い穴があつたのは……町で探していた猫の体、ゼリ湖の大きなサハギンの体、砂漠のオアシスの底、フュー火山のドラゴン。……分かりました！」

生き物に黒い穴が出ます！」

「なるほど、さすがグレイス！ 私の妹なだけあるぞ！」
グス公の意見に対し、アマ公が素晴らしいと喜ぶ。

しかし、その直後に冷静な声が聞こえてきた。

「グレイス様、アマリス様、オアシスは生き物ではありません」

「あ、あうあう……」

「あうあう……」

眞面目に考へているのは分かるが、あの『あうあう』姉妹は駄目だな。

大きくなめ息をつくと、坊ちゃんが苦笑いをした。

使えない奴らのことは置いといて、指でチビを突きながら考へる。

グス公の結論はともかく、今までのことを整理してみるのは悪くねえ。

まず、黒い穴は魔力を吸つていた。ということは、犯人の目的は魔力なんだろう。

……魔力、魔力だ。魔力……。そうか！

気づいた俺は、バッと立ち上がった。

「零さん、急に立ち上がらないでください」

「うるせえ、それより分かったぞ！ 黒い穴は大精靈がいるところの近くに現れてやがる！ 魔力

が欲しいから、魔力の多いところに出てくるんじやねえか？」

「さすが零さん！ 私もそう言いたかつたんです！」

「グス公は黙つてろ！」

「うう……本当にそう思つていたのに……」

ぐすぐぐ言つてるグスグス公はともかく、魔力を求めている奴が魔力の多いところを狙うのは当

然だ。

つまり、黒い穴が出るのは魔力の強い大精靈のいる場所。よし、完璧だ。

これで次に黒い穴がどこに出るかが分かるぞ！

俺はグッと拳を握つたのだが、わざとらしい咳払いが聞こえて目を向けた。

そこにいたのはディーラだ。ディーラは緩んだ目をし、ぽわんとした表情のまま口を開いた。

「零、一ついいか？」

「おう、どうした？」

「その理論でいくと、大精靈がいた四つの場所にはもう黒い穴が現れたことになると思うぞ？」

「あ？ あー、そりやあれだ……その……あれだあれ。……えーっと……駄目か」

考え方は間違つていなかつたと思うが、オチがついいまつた。

そうか、もう大精靈のいた場所には穴が出ちまつたんだよな。

立ち上がりついた俺は座り、頭に落ちたタオルを載せ直す。

元気出せよと言わんばかりに、チビ共が俺の肩を叩いていた。

湯の中に口を突つ込みボコボコと泡を出していたディーラが、ピクリと何かに反応し、顔を上げる。

釣られて俺と坊ちゃんも顔を上げたんだが、特に何もねえ。

元の世界と違い、明かりの少ないこの世界では、夜空を見ても満天の星が浮かび上がつてゐるだけだった。

手を重ね合させ、お湯をディーラの顔に飛ばす。

しかし、ディーラは微動だにしなかつた。

不思議に思いつつディーラの様子を窺うが、ディーラはじっと空を見つめて固まっている。俺は首の後ろを搔きながら、思いつくまま声をかけた。

「星が綺麗だつてか？」

「いや……今、何か妙な感じがしなかつたか？」

「妙な感じ……星でも落ちてきましたか？」

「落ちてきてたまるか」

俺は坊ちゃんに呆れ顔で答えたのだが、ディーラは無言で空を見続けている。

普段であれば気にせず風呂を引き続き楽しむところだが、今はこの世界に問題が起きている。妙な感じってのは気のせいだろ、なんて流すことはできない。

ディーラは一体何を感じたんだ？

俺らとは違うドラゴンって生物には、特別なものを察知する力があるのかもしれねえ。

何があつたんだ？ と、じつと見ていたんだが、ディーラは空を見ているだけで何も言わない。

……なんだよ、別に大したことじやねえのか？

どうせ、流れ星を見つけたとか、そんなことだろう。大事な話をしているときに困ったもんだ。やれやれ……と思つていると、いきなりチビ共が俺の体を引っ張りだした。

おいおい、お前らまでどうしたんだ？

遊んでほしいのかと思ったんだが、どうやらそうじやない。今まで見たことがないほど、チビ共

は慌てていた。

坊ちゃんもそれに気づいたようだ。

「零さん、精霊たちの様子がおかしいですよ」

「ああ、分かつてる。チビ共どうした？ 何があつたんだ？」

聞いてみたんだが、チビ共は泣きそうな顔で俺の顔を引っ張つていてるだけだ。俺をどこかに連れてい行こうとしているのではなく、何かを訴えている感じだつた。

チビ共は全員同じ方向を指差している。その方向を見ながら、俺はあつちに何があつたかを必死に思い出そうとした。

何かまずい気がする。

指差しているのは北東だ。こつから北東に何がある？

街道、カーラトの町……精霊の、森？

さつきまで考えていたことが頭を過る。

魔力が豊富にある場所——その条件に当てはまるところがあるだろ！

「まさか、精霊の森で何かあつたのか!?」

俺の問いに対し、チビ共はただただ頷く。それで推測は確信に変わった。

よく考えるまでもなく、気づくべきだつたんだ。

狙う。

それがどこかなんて考えるまでもねえ。

精霊の森だ。

急ぎ湯船から出て、脱衣所に置いてあつた鉄パイプを握る。

ディーラを見ると、俺と同じ考え方だつたらしく頷いた。

「てめえら行くぞ、精霊の森だ！」

「我が背に乗ることを許そう」

「待つてください！」

すぐにでも向かおうとしていた俺を止めたのは、まさかの坊ちゃんだった。

こいつ、今がどういう状況か分かつんのか？ 急がないと間に合わないかもしけねえんだよ！ 苛立ちを抑えられずに文句を言おうとしたら、坊ちゃんが俺の肩を掴み、タオルを差し出した。

……タオル？ あ、やべえ。

「服を着てからにしましょう」

「お、おう」

「私たちに裸で行けって言うんですかー」

「乙女に柔肌を晒せと言うのか！」

「ボケナス」

「うるせえ！」

三者三様のツッコミを受けつつ、俺は急いで部屋に戻り身支度を整えることにした。

精霊の森は、俺にとつて聖域のようなもの。

何かが起きるとは考えたくねえし、何も起きてほしくないと思つていた。

そんな考えだつたから、一番大切な場所から目を逸らしていたんじゃないかな？ ちつ、まつたく情けねえもんだ。

だが、きつとまだ間に合う。そう信じるしかない。

俺は焦りながらも四人と共に宿を飛び出し、ディーラの背に乗り込んだ。

第二話 僕がなんとかしてやるからよ

夜の闇を切り裂き、ドラゴンが滑空する。

俺はディーラの首元で真っ直ぐに立ち、鉄パイプを赤黒い鱗に杖のようについていた。

「零さん、危ないから座つたほうがいいです！」

「大丈夫だ、心配すんな」

「大丈夫なわけがないだろ！」

「どういふか、なぜ立つているのですか?!」

「なんとなくに決まつてんだろ！」

ディーラの背にしがみ付いているグス公、アマ公、坊ちゃんに答える。

おつかなびっくりな表情をした三人は、風圧に耐えるために身を伏せていました。

情けねえ奴らだなあ。背中をバシッと叩いて気合いでも入れてやるか？

手の平にハーツと息を吹きかけたところで、一人足りないのに気づく。

あれ、リルリはどこだ？

不思議に思いキヨロキヨロ周囲を見たら、俺のすぐ後ろで正座しているメイドがいた。

悪い、小さすぎて見えなかつたわ。言つたらもちろん怒りだすから、口には出さないでおいたが。

俺はポンッとリルリの頭の上へ手を置き、三人に言う。

「お前らリルリを見習えよ」

「ボケナスもたまにはまともなことを言う。皆、落ち着いてお茶でもどうだい？」

「お茶なんて飲んでいられるか！ 見習つたら落ちるではないか！ そもそもなんでお前たちは平氣なんだ!?」

アマ公の言葉を聞き、俺とリルリは同時に首を傾げた。なぜって言われてもなあ……。

三人の視線が集まる中、リルリとこそこそと話す。すぐに結論が出て、俺たちは自信満々に告げた。

「こう、少し体を前に傾けて気合いで立つてる。そんな感じだ」

「そよう、重心を動きに合わせて移動しつつ、気合いでなんとかしているよ」

「さつぱり分かりません！」

グス公はすぐに首を横に振る。

その後もなんとか説明しようとしたんだが、「気合いつてなんですか!?」と言われるだけで全く

理解されない。

あまりにも三人がギャーギャーと否定するので、最後には俺とリルリはしょんぼり俯いてしまつた。

そんな俺たちのことは気にもせず、ディーラは飛び続ける。

そして、あつという間に精霊の森が見えてきた。真つ暗な中で景色はどんどん流れしていくが、思い入れのある場所はすぐに分かる。

夜のせいか、いつもより黒い森を見て、俺は唇を噛み締めた。

「零、そろそろ降りるぞ」

「おう！ 行くぜ！」

居ても立つてもいられなくなつた俺が飛び降りようとしたら、すぐさまチビ共に引っ張られた。わ、悪い。ちょっと焦りすぎてたな。今のは高さ的にもやばかった。

ゆつくりと地面へ降り立つたディーラは、また体を小さいサイズにする。デカいまま森を闊歩したら、あつという間に木々がぐしゃぐしゃになつちまうからな。便利なもんだ。

俺たちも準備を整える。何かあつたときのことを考えて装備を確認し直し、グス公の出した魔法の炎で周囲を照らしてもらい、精霊の森に踏み込んだ。

飛び跳ねながら先導するチビ共を目印に、暗い森の中を進む。

激しい物音なども聞こえず、いつもと変わらない静かな森。

しかし、焦りは消えねえ。

本来なら朝を待つべきだったのかもしれないが、そんな余裕は俺にもチビ共にもなかつた。一年間、チビ共と過ごして慣れきつている場所だ。暗くとも、どこがどうなつてているかは分かつてゐるので、転ぶことなく進むことができる。

「ふぎやつ」

……慣れているのは俺だけだつた。

だが俺以上に焦つてゐるチビ共を見ていると、どうにも気が急いちまう。

グス公に手を差し出して早く立ち上がらせようとしたら、ぐいっと引っ張られた。

「おい、グス公。今は急いでんだ」

「分かつてます。いつもなら精霊たちが零さんを落ち着かせてくれるのに、そうじやないみたいですもんね。だから、私と一緒に深呼吸をしましよう！　はい！　スー……ハー……」

「だからそういう場合じゃ……」

「零さん」

グス公は真っ直ぐに俺の目を見ている。目を合わせてゐるだけなのに、不思議と焦りが少しづつ落ち着いていった。

俺は言われた通りに深呼吸を始める。グス公と一人でやつていたのだが、気づけばチビ共も、他の三人も一緒に深呼吸をしていた。

落ち着け、もう森には辿り着いている。落ち着け……落ち着け……。

五回ほど深呼吸をしたら、少し冷静になつてきた。

見えてみると、チビ共も落ち着きを取り戻したみてえだ。

「悪い、助かったグス公」

「いえいえ、どういたしまして」

「グレイス様に深呼吸を提案したのは僕だけだな」

「リルリ！　そこは内緒にしておいてくださいよ！」

どつちが言い出したかはどうでもいいんだが、一人は言い争つてゐる。やれやれと思いつつも、俺は妙に感心していた。

たまにこいつらはすぐえんだよなあ。

素直に心の中で感謝していると、ディーラが隣で俺のことをじつと見ていた。

何か言いたいことでもあんのか？　不思議に思いながら見ていたら、竜は嬉しそうに目を細めながら言つた。

「良き仲間だな」

「……はつ、色々うるせえこともあるけどな」

俺の言葉を聞き、ディーラは無言で一度頷いた。

だが、和やかだつたのはここまでだ。

精霊の森の、奥深く。

チビ共と過ごしていた洞窟の近くに辿り着き、俺は体を震わせた。

鮮やかだった木々は黒く染まっている。決して夜で暗いから見間違えているのではない。

幹も、枝も、葉も。全てが黒くなっていた。

落ち着いたはずだった俺の頭に、一気に血が上る。

しかし、左右から両腕を掴まれた。

右にはグス公、左にはリルリ。足にはチビ共がしがみついている。

アマ公と坊ちゃんも俺の肩を掴んでおり、自分がどれだけやべえ顔をしていたか一瞬で分かった。

抑えろ、まだ飛び出すのは早い。原因が何なのか調べねえと……！

俺は四人とチビ共を見回し、一度頷く。大丈夫だ、何とか堪えてるからな。

皆の手が俺から離れたのを感じ、一步踏み出す。

怒りを足に込め、地面を踏み潰すように歩いた。

我慢の限界に達していた俺の目に映ったのは、あの洞窟。

そしてその前にある、黒い穴だった。

「――がああああああああああ！」

美しい森を黒く染めたものがなんだったか理解し、堪らず叫んだ。

俺を再び押さえようとした四人とチビ共を振り切り、鉄パイプを握って走りだす。

向かう先は黒い穴。

飛び上がり、両手で握った鉄パイプを思いつ切り振り下ろそうとする。

だが、俺の腹に何かが当たつて吹き飛ばされた。

「ごほっ。……ああ!?」

腹を押さえながら、突っ込んできたものを睨みつける。

目の前にいたのは闇よりも深い色をした、犬のような獣だった。

犬のような、というのはそう表現するしかないからだ。

黒い靄に包まれてゆらゆらと揺らめいており、形は犬だが明らかに普通の奴とは違う。

その紅い眼は、怒りに満ちている俺をさらに煽つた。

俺とチビ共の居場所を。こいつがこんなにしたんだ。

絶対に、絶対に許せねえ！

思いつ切り睨みつけ、もう一度飛び掛かろうとする。だがそれよりも早く、俺の背から赤と青と黄の閃光が犬っこころに奔つた。

「体勢を立て直せ！ こいつの相手は私たちがする。零は穴を叩け！」

「……おう！」

そうだ、アマ公の言う通り、元凶は黒い穴だ。

息を大きく吸つて感情を抑え込み、クソ犬っころをアマ公たちに任せて穴の前に走る。しかし、援護の魔法は急に軌道を変えて、黒い穴に吸い込まれていった。

本当にこの穴は厄介だな！

魔法だけに頼つてここまでやってきたわけじゃないが、面倒なことには変わりない。

けど、先に穴を壊しちまえば、こいつだつて大人しくなんだろ！

この穴と犬つころは何か関係があるという確信を持ち、俺は穴へ走る。

——だが、そう簡単にはいかない。

犬つころは四人には目もくれず、俺の方に飛び掛かつた。大きく口を開き、喉元目掛けて。一瞬の間に必死で考える。

鉄パイプでぶん殴るか？　いや、間に合わねえ。

左腕を噛ませるか？　それじゃ黒い穴に辿り着けない。

……駄目だ、一度下がるしかねえ！

慌ててブレーキを掛けようとしたその時、俺の背中が強く押された。

俺の背を押しつつ後方から飛び出してきたのは、アマ公だ。

剣を高く構え、上から下に。犬つころ目掛けて縦一閃に振り下ろした。

しかし、犬つころは空中で体を捻り、そのまま剣に噛みつく。

ギラリと光る紅い眼は確実にアマ公を捉えていた。

「アマ公！」

アマ公の短い呻き声。手を引こうと伸ばしたのだが、俺たちの間を縫うように何かが通る。

弾丸のような速度で動く赤黒い生き物——それはディーラだつた。

ディーラは大きく顎を開き、黒い犬に噛みつく。

「ぐつ」

そしてそのままディーラの口に吸い込まれていき、黒い犬は完全に姿を消した。

……今だ！
あの黒い犬はなんだつたのか。そんなことを考えるよりも早く動き、黒い穴目掛けて鉄パイプを全力で振り下ろす。

パキリッと割れるような音。手応えありだ！

手に確かな感触が残り、黒い穴は碎け散る。

そうして、森には静寂が戻つた。

俺は親指で鼻を擦り、やりと笑つた。

穴があつた場所、そして周囲の森を限なくチビ共と確認する。

しかし、黒く染まつた森が戻ることはなく、ここに残つて暮らしていたチビ共も見つけることができなかつた。

「くそっ！」

鉄パイプで地面を叩く。

間に合わなかつたという事実が胸を締めつけ、暗い感情と悲しみだけが湧き上がってきた。もつと早く来られたら、もつと早く気づいていれば——後悔ばかりが出てしまう。

チビ共が顔を押さえ俯いているのも、俺の心を重くする。

胸に手を当てて渦巻く感情にじっと耐えていると、ふと聞き覚えのある声がした。

「精靈は無事がな」

まさか……なぜこいつが？ そう思いつつも顔を上げる。

いつの間にか目の間に立っていたのは、土の大精靈。その足元にはたくさんのチビ共がいた。

無事だったのか？

俺は嬉しさのあまり、岩の着ぐるみを掴んで揺する。

土の大精靈は「がながな」言いながら、俺の手を振り払った。

「落ち着くがな！ 零が地上に戻つてから不安に思つて、ちよくちよく精靈の森を見に来てたがな！ で、異変に気づいて精靈たちを逃がしたがな！」

「そう、か。……良かつた」

力が抜け、地面に座り込む。チビ共が飛びついてきたが、顔を上げて力なく笑うことしかできなかつた。

そんな俺の前に手が現れる。につこりと笑つて差し出しているのは坊ちゃんだ。俺はその手を掴み、立ち上がつた。

「僕は大丈夫だと思つていました」

「……膝、震えてんぞ」

「気のせいですよ」

精靈が消えたと思つていたのは、たぶん坊ちゃんだけではなく他の奴らも同じだつたんだろう。皆の安堵した表情からも、それはすぐに分かつた。

少し落ち着いたので土の大精靈に礼を言おうと思ったのだが、見るとディーラと二人で渋い顔をしていた。

その様子を見て、また胸に焦りが浮かぶ。

——まだ何も終わつてねえ。むしろ、今始まつたんだ。

頭の中にそんな言葉が過り、ごくりと唾を呑み込んだ。

「どうした？」

「精靈の森は世界で一番魔力が満ちていた場所がな。でも、今はそれが残つていないがな。ここにある魔力の残滓から考えるに……」

「ああ、我也確信した。あいつの仕業だ」

「あいつ？ 何が分かつたんだ、説明しろ」

そう聞いたにもかかわらず、土の大精靈もディーラも黙つたまま何も言わねえ。

疲れを切らした俺が、もう一度聞こうとしたときだ。土の大精靈が、いつもとは違う真剣な表情で告げた。

「朝になつたら、城の地下にある祭壇へ向かうがな。全ての説明はそこで行うがな」

「ここですりやいいだろ」

「全員一緒にしたほうがいい」

さつさと話せよと思つてそう言つたんだが、ディーラに止められた。

全員つてのが誰を指しているのかは分からねえが、何か理由があるようだ。

他の奴らに目を向けると、俺と同じく首を傾げていた。どうやらこいつらにも分かつてねえらしい。黒幕が分かつたというのに、話さない。

なんだか嫌な気分になつていて、ディーラが続けた。

「もう我々だけの問題ではない。人、大精靈、この地上に生きるもの全てが力を合わせなければならぬ」

「——そんなやべえことになつてんのか？」

俺の言葉に対し、無言で土の大精靈とディーラが頷く。それだけで、想像以上に深刻な事態なのだと分かつた。

今からでも城に向かいたいところだが、もう真夜中だ。

土の大精靈の言う通りにひとまず休んで、日が昇つたらすぐに出発だな。

妙な焦りがある中、俺たちは朝を待つこととした。

焚き火を囲み、横になつて朝を待つ。

だが眠気が押し寄せて来ることはなく、目を瞑つているだけだつた。

あいつらに教えてもらえないせいで、色々と想像してしまう。

ディーラたちは、何かを知つてゐるようだつた。気になるのは、その一点に尽きる。

なぜ教えない？　ここで教えない理由は？

考えても分かるはずがないのに、考えずにはいられない。

——駄目だ、少し歩こう。

氣を紛らわそと、俺は立ち上がつた。

「零さん？」

グス公の声がして振り返ると、四人が俺に目を向けている。

眠れなかつたのは自分だけではなかつたと分かり、苦笑しちまつた。

軽く手を振り、散歩だと告げる。四人はついてこようとはせず、静かに頷いた。

空を眺めつつチビ共と歩く。なんとはなしに目の前の黒い葉に触れると、カサついた葉が崩れて散つた。怒りとともに、悲しみが湧いてくる。

とても綺麗な森だつたのに、その面影はない。

チビ共が無事だつたことは嬉しいが……一体何が起こつてゐんだ？

くそつ、焦りと不安しかねえな。

「はあ……」

ため息交じりの声が出る。周囲をとてと歩くチビ共も俺の様子を見て、しょんぼりしていた。

考えるまでもなく、俺よりも長く暮らしていきたこいつらのほうが悲しいだろう。そう思うと、自分の情けなさが腹立たしかつた。

暗い闇の中、黒い森を歩く。氣を紛らわそとと思い立つた散歩は、俺の気持ちをより重くしてゐた。これじや意味がねえ、戻るか。

そう思つて立ち止まつたとき、微かな話し声が耳に入つた。

いや、人の話を盗み聞きするのは良くねえ。

すぐに踵きびすを返したが、足を踏み出せなかつた。

また聞こえてきた声が、ディーラと土の大精靈のものだつたからだ。

俺の胸がモヤモヤしていいる理由は、この二人が話してくれないこと。

話さない理由が何があるんだろうとは思うし、だからこそ聞いてはいけないと分かつてゐる。

なのに、「人の声は耳に入つてしまつた。

「魔……復讐ふくしゅう……我らが……」

「しかし……助け……責任……がな」

はつきりとは聞こえない。耳を澄まそうかとも思つたが、それは何か違う気がする。

俺は物音をわざと立てつつ、二人に近づいた。

現れた俺を見て、口を噤つぐむ二人。堂々と近づく俺に対し、二人は目を逸そらした。

「こそこそ何話してんだ」

「……どこまで聞いた？」

「大して聞いてねえよ。わざわざ隠れて話してゐるのに、こつそり聞き耳立てるような真似はしたくなかったからな。復讐ふくしゅうとか責任とか、そんな言葉だけだ。……まあ、気になつてたこともあつて、少しだけ聞いてしまつたことは勘弁してくれ」

素直に謝罪して聞こえた単語を告げると、渋い顔をしていた一人は、ほつとした表情に変わつた。どうやら本気で聞かれたくない話だつたらしい。

ならこんなところで話すなよとも思うが、たまたま俺が通りがからなければ、こいつらも困らなかつたんだろう。

気まずそうな顔をしていいる一人に気づき、俺は背を向かた。

「どうせ城に行きや話してくれるんだろ？ それでも、もうちょっと話す場所は考えたほうがいいぜ」

返答を待たず、その場を立ち去る。

なんとなく悪いことをしたという思いが、胸に残つた。

……戻つて休むか。またさつきみたいな状況にぶち当たつたら、余計気が沈んじまう。

頭を搔きつつ戻ろうとしたら、チビ共の様子がおかしいことに気づいた。

俯いて、顔を見せてくれない。表情が見えず、悲しんでいるのかも分からねえ。

ただ、決して楽しそうではないことだけは理解できた。

「どうしたチビ共？」

チビ共は、俯いたまま首を振る。

何度聞いても理由を教えてくれず、こっちまで悲しくなつてきた。

ズーんと気持ちが重くなつて肩を落としていると、チビ共が俺のことをちらちらと見始める。そして何かを告げようとして、だがまた俯いてしまつた。

「なあ、なんか困つてるなら教えてくれないか？ 俺がなんとかしてやるからよ」

いつもと違つて、俺の言葉にも勢いがねえ。こんな様子のチビ共は初めてで、戸惑つていた。